

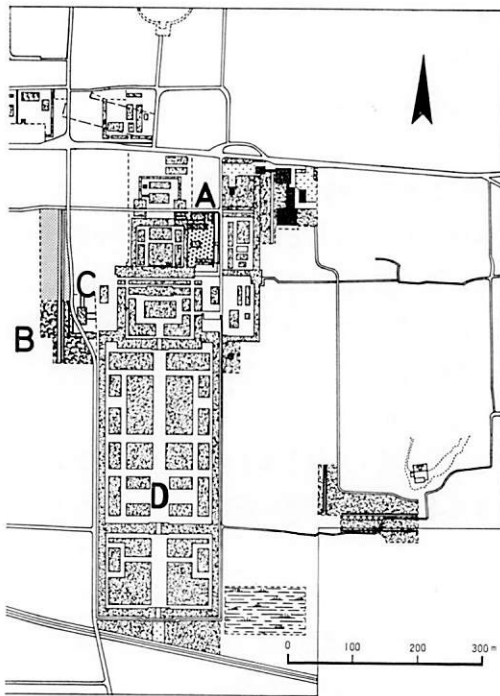
平城宮跡の整備(6)

平城宮跡発掘調査部

1975年度の宮跡整備は、第2次内裏内郭および内郭築地回廊基壇復原整備、第2次内裏外郭整備、緑陰帯造成、灌水施設、案内板、照明灯の設置を行った。

第2次内裏内郭築地回廊基壇復原整備 1974年度に東楼をふくむ築地回廊東南隅部を復原整備したが、今年度はこれに接続する東面回廊を延長し、北へ78.5m分施工した。発掘回数でいえば第3・70・73次にあたり、門2ヶ所(S B7951, S B6900)を含む桁行20間分である。この部分では築地心より2.5m以東は、南北に通る市道と大正時代に整備した側溝のために遺構が確認できず今回も施工していない。

復原にあたっては遺構を保護することを第一義とし、かつ往時の姿を再現しようとするところから、1 遺構面より一定寸法のレベルアップをする。2 遺構での多少の施工むらは除き、基準方位・基準寸法を設定するという方針をとった。1 に関しては、既施工の東南隅部で採用した70cm高が、次年度予定している東面中央部での井戸跡現寸遺構模形据付けのためにも支障がないことを確認したのでこの数値をとった。一方勾配はこの2点を直線で結ぶ南から北へ昇る1.25/1000の勾配とした。2 に関しては次年度以降の施工のこともあり、現在までにはほぼ完掘



第1図 平城宮跡整備図

している東面築地回廊全長にわたっての検討が必要であった。遺構上で方位がひろえるのは次の4条であり、それぞれ平城宮実測方位より北で西に振れる傾向がある。

イ、築地東寄柱心—東面全長で5個の礎石が残存しており、それを結ぶ線は4.35/1000西偏。

ロ、築地西寄柱心—62m隔たった2個の礎石で3.10/1000西偏。

ハ、西側柱心—井戸位置での2個の礎石では3.54/1000西偏。

ニ、西雨落溝—比較的残存状況の良い6地点で4.19/1000西偏。

この4つの数値のうち、ハが発見した礎石およびその周辺遺構の残存状況が他に比し良好であること、4条の平均的な数値であること、北面築地回廊との関係とも矛盾しないことなどから最も妥当なものと考え

え、今回はこれを採用した。

この結果、北面築地回廊との角度は $90^{\circ}12'10''$ の鈍角となった。現在までの発掘で南面は北面と平行であることが認められるから、築地回廊一郭は正方形とはならず、平行四辺形、あるいは台形であることが考えられる。また、この角度が東面築地回廊全長（南北築地回廊心々）185.96m に対し実長として66cm となりその数値が比較的僅少であるところから、当時の施工誤差とも考えられる。平城京の条坊方眼も東西方位に対し、南北方位の振れが大きいとみられるから、これとの関連においてさらに検討を加える必要があろう。いずれにしても西面築地回廊が未発掘である現時点ではいずれともきめがたい。

ちなみに平城宮跡の発掘調査で使用している方位は、この北面築地回廊の北雨落溝の東西線を基準にしたもので、国土方眼よりも $0^{\circ}07'47''$ 西で南偏する。

柱間寸法については、東面での3個所の門も他の間と同一寸法であるから、全長を総柱間数48で除すと1間が3.874m となり、13尺（1尺は29.8cm）の整数を得る。梁間寸法も桁行と同様に13尺である。

なお、今年度施工区では築地回廊のほかに、掘立柱建物5棟および内裏掘立柱回廊東北部などの盛土、張芝による遺構表示を行った（第1図A）。

緑陰帯造成 1974年度から始めた緑陰帯造成を、今年度は南へ約105m（5100㎡）延長した。遺構表示として、前年同様第2次内裏外郭築地の西側を流れる南北大溝（SD3715）を和泉砂岩割石で護岸し表示した。植栽については、西側からの大極殿や東山等の眺望をさまたげないよう1本/250㎡程度の密度におさえた疎林とした（第1図B）。

内裏外郭整備 第91次発掘調査により確認された第2次内裏外郭築地西南隅の門と築地塀、および礎石建物1棟を含む約3000㎡について整備した。これら建物遺構は、宮跡中央を南北に走る市道によって分断されているため、一部表示出来なかった。門および築地塀は平均70cm、礎石建物は平均40cm盛土してその規模を表示し、表面は張芝とした（第1図C）。

その他 第2次朝堂院・朝集殿地区に灌水施設として自動散水装置（スプリンクラー80基、散水栓2基、第1図D）、照明設備（水銀灯4基）案内板（遺構名称板8基）を設置した。

（渡辺康史・細見啓三）



第2図 第2次内裏西外郭の整備